

第 109 回 歴史リレー講座「郡山城の誕生から廃城まで」 柳澤 保徳氏 (R5.10.15)

興福寺多聞院僧侶の手による『多聞院日記』によると、郡山城は天正 8 年 (1580)、筒井順慶によって築城が始まり、5 年後に入城した豊臣秀長 (秀吉の弟) が百万石の城造りに着手しました。関ヶ原の戦いのあとのおよそ 15 年間は廃城の危機 (城主不在) が続きましたが、徳川家康の一国一城令のもと、水野勝成が城の再興に尽力。その後は松平氏や本多氏らを経て柳沢氏へと受け継がれ、明治 6 年 (1873) に廃城令が出されるまで威厳を保ち続けました。郡山藩主の柳沢吉里は、5 代将軍徳川綱吉に重用された柳沢吉保の嫡男です。吉里はもともとは甲斐甲府藩主でしたが、享保 9 年 (1724)、8 代将軍吉宗から国替えの命を受け郡山に転封。来年は吉里入城 300 年という記念の年ということになります。

郡山城跡は秋篠川と富雄川に挟まれた丘陵地に位置しています。残念ながら天守閣は残っておらず、城郭全体の発掘調査が待たれます。しかしながら、内堀や石垣などの保存状態は比較的良好で、昨年 11 月には市民悲願の国指定史跡に指定されました。江戸時代の建物のほとんどは、廃城令発布の際に競売にかけられ、旧二の丸は学校用地に払い下げられました。敷地常盤曲輪内の城址会館 (木造) は県指定文化財。もともと奈良公園の中にあった旧奈良県立図書館を昭和 45 年に移築したものです。城正面の追手門、追手東隅櫓、追手向櫓は昭和 58 年から 62 年にかけて復元され、平成になると天守台の石垣や天守に通じたとされる極楽橋などが修復・再建されました。

さて、『多聞院日記』には文明 10 年 (1478) から元和 4 年 (1618) にかけての 140 年間の出来事が記されています。その内容は寺院の暮らしぶりについてのみならず、ときの政情や経済・文化と多岐にわたります。城を中心としたまちづくりが盛んになったのは 16 世紀後半の豊臣秀長と秀保の時代でした。NHK 大河ドラマ「麒麟が来る」にも描かれていたように、織田信長に命じられた明智光秀が実際に築城工事の視察に訪れていたという記述も見られます。資材の調達ですが、石はできる限り近場 (春日山原生林など) から運び込まれ、木材は木津から取り寄せられました。天正 12 年 (1584) に順慶が死去した翌年には秀長が入城し、精力的に城の普請を進めました。資材の調達ですが、石はできる限り近場 (春日山原生林など) から運び込まれ、木材は木津から取り寄せられました。そして天正 16 年 8 月に徳川家康が郡山城を訪れました。このとき秀長は大和大納言に昇進していました。同年 9 月には毛利輝元が小早川隆景らを従え来城したことが『毛利輝元上洛日記』に記されています。京都経由でやってきた輝元を秀長が奈良阪あたりまで出迎えていることから、その歓迎ぶりが窺われます。

元和 5 年 (1619) には松平忠明 (家康の外孫) が城主に就任します。忠明は大坂夏の陣以降、大坂の土地整備に尽力した人物として有名です。寛永 16 年 (1639)、姫路へ国替えした忠明に替わって本多政勝が姫路より入城。享保 8 年 (1723) に本多家の後嗣が絶えて藩主不在に陥りました。そのため、翌年に柳沢吉里が入城、金魚の養殖を推奨したことで知られます。柳沢家 3 代藩主保光は赤膚焼の復興をはじめ文化芸能を興隆したことで知られます。最後の城主保申の時代、安政元年 (1854) には安政伊賀上野地震により、城下倒壊 150 軒、死者 120 人という甚大な被害を受けました。

明治維新の廃藩置県後、保申は藩知事免官ののち東京に移住。廃城令後は城下町の趣を残しつつも、郡山中学校や役所などの土地開発が進められました。大正 10 年には城址の南側に大阪電気軌道 (現近鉄) 郡山駅が開業。また、城跡の東側では明治 26 年から昭和 39 年までは大日本紡績 (現ユニチカ) の郡山工場が操業していました。平成 29 年には天守台の展望施設が完成しました。また、令和元年には、秀長時代の家臣団屋敷の一部とみられる遺構が三の丸で見つかりました。江戸時代の絵図面によって武家屋敷の存在は知られていましたが、この発見によって確実となりました。